

34 看護部

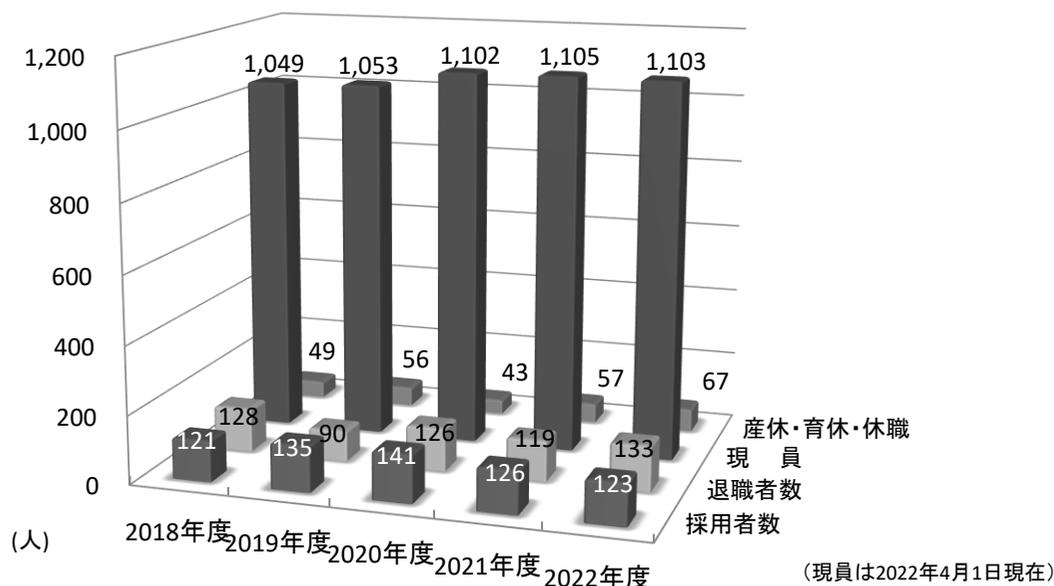


看護部は“SWEET”【 S(sincerity)：誠実な行動、 W(warm)：あたたかい対応、 E(evidence)：根拠ある実践、 E(ethics)：倫理的感性、 T(technique)：確かな技術】をモットーに、看護職員一人ひとりが自己の役割と責任を果たすべく看護業務に取り組んでいる。看護職員の確保・定着に努めることで在職者の平均勤務年数も年々増え、産休・育休を取得して働き続ける職員も多い(図34-1, 34-2)。

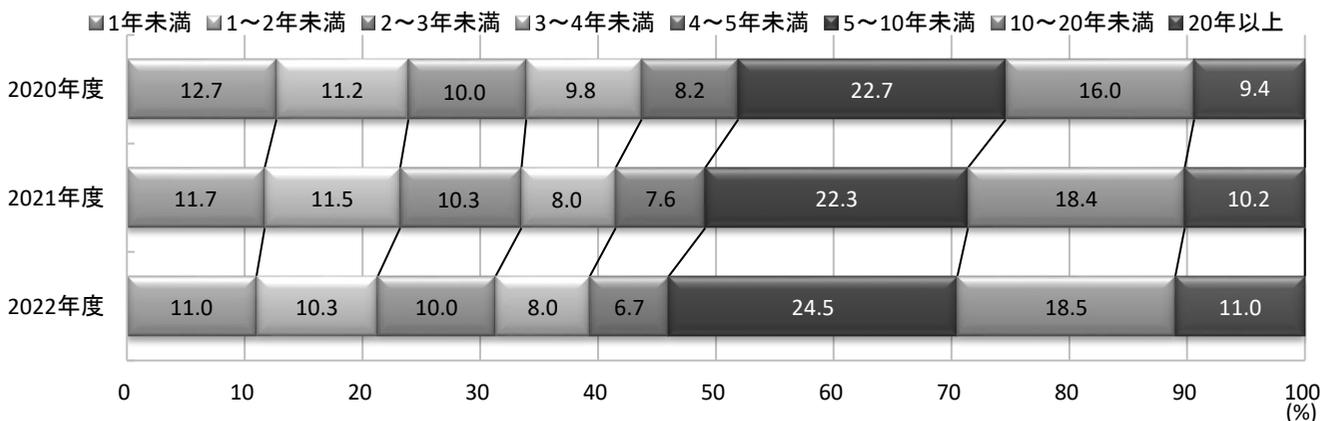
重症度、医療・看護必要度において、A項目は急性期医療・処置(ME機器の装着・管理、薬物の投与・モニタリング等)を、B項目は患者さんの生活支援状況(動作制限や認知度による介助等)を、C項目は手術等の医学的状況を評価している(図34-3, 34-4)。患者さんの観察度、生活の自由度(図34-5, 34-6)からは重症患者さんが年々増加してきているものの、依然として全病棟で常にB項目の点数が高く、日常生活援助に多くの看護力を費やしている状況である。特定機能病院の7対1入院基本料の施設基準である「重症度、医療・看護必要度Ⅱ」の判定基準28%以上を維持するためには、医療処置を必要とする患者さんの増加への取り組み、また、生活支援が主たる患者さんの早期退院(在宅・転院)が必須となる。

「地域完結型」の医療・看護提供を目指し、入院前から退院支援に取り組み、当院での医療処置が終了した患者がスムーズに退院・転院できるよう、医師・メディカルスタッフをはじめ、地域の医療関係者との連携を強化していく。さらに在院日数の短縮により、医療処置・ケアニーズの高い患者さんが外来へとシフトしていることから、在宅療養指導や看護外来の充実を図り、患者支援強化に向けた取り組みを継続している(表34-7)。今後も入院前から退院に向け、積極的に介入し、継続看護の更なる質向上を目指す。

34-1 看護師数の年度別推移



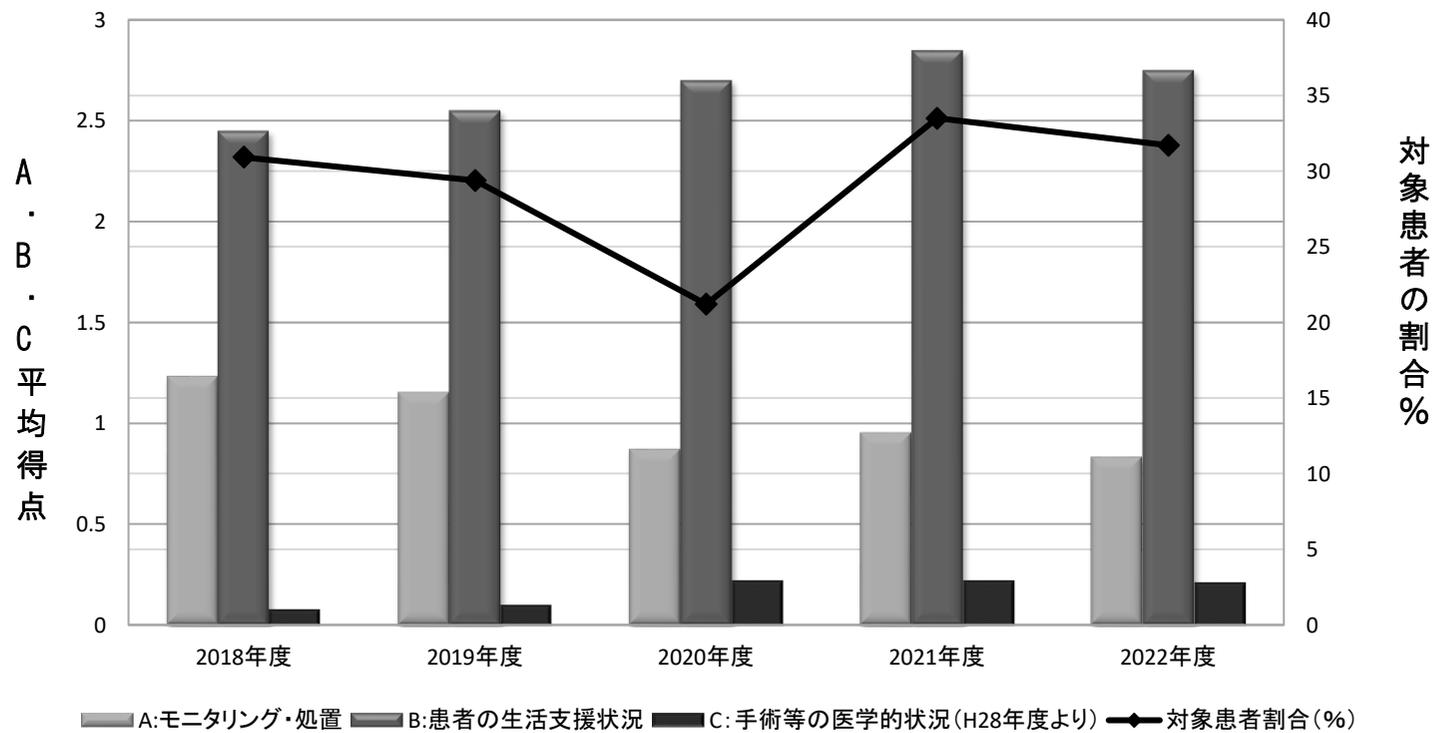
34-2 看護師当院在職年数別の年度別構成比率(各年度4月1日現在)



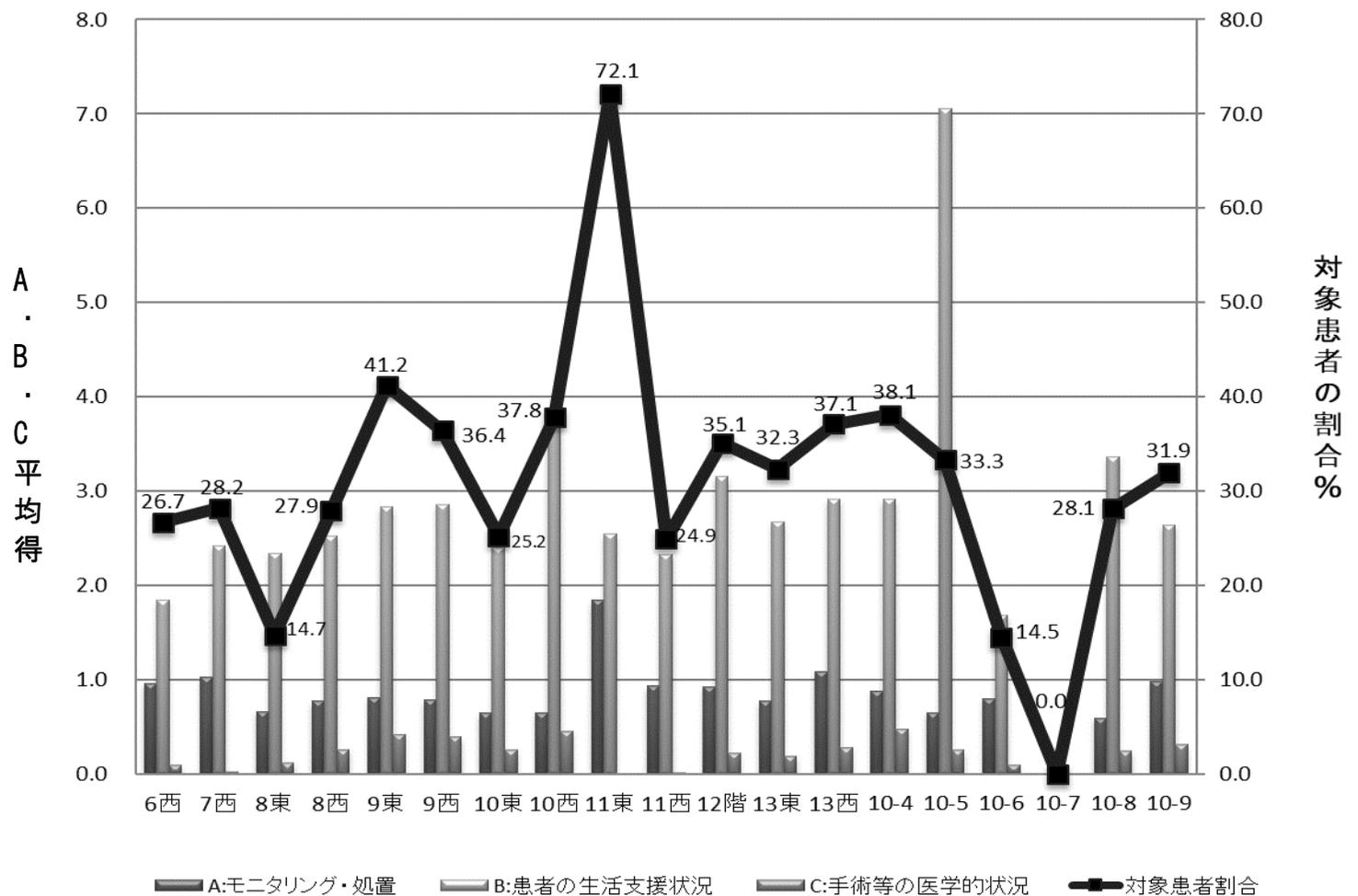
34-3 7対1対象病棟における重症度、医療・看護必要度平均得点の年度推移

対象患者 ・ A得点2点以上かつB得点3点以上
 ・ A得点3点以上
 ・ C得点1点以上

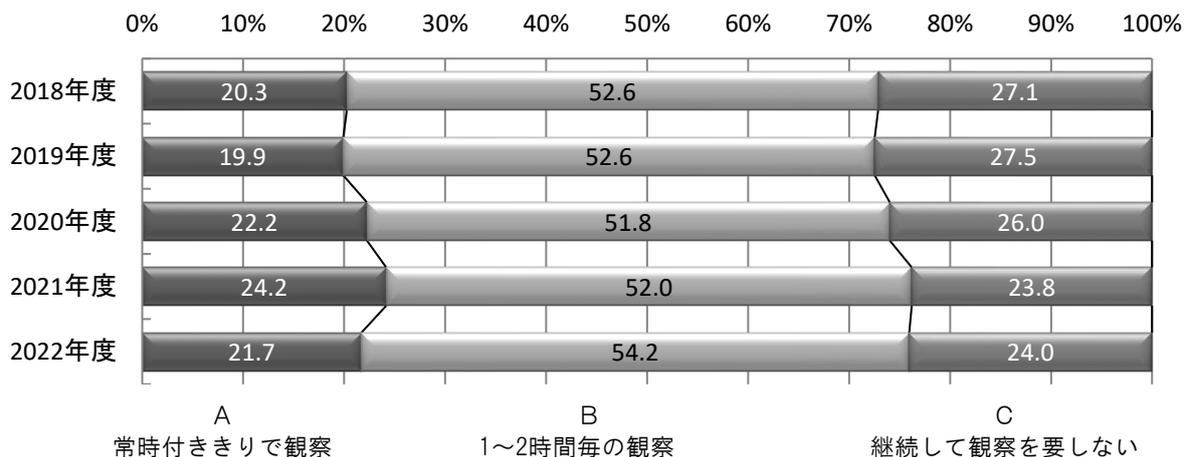
※2016年度診療報酬改定により項目の変更、C項目の追加あり。
 ※2018年度診療報酬改定により項目の変更、対象患者の基準の変更あり。
 ※2020年度診療報酬改定により、C項目の算定日数の変更あり。



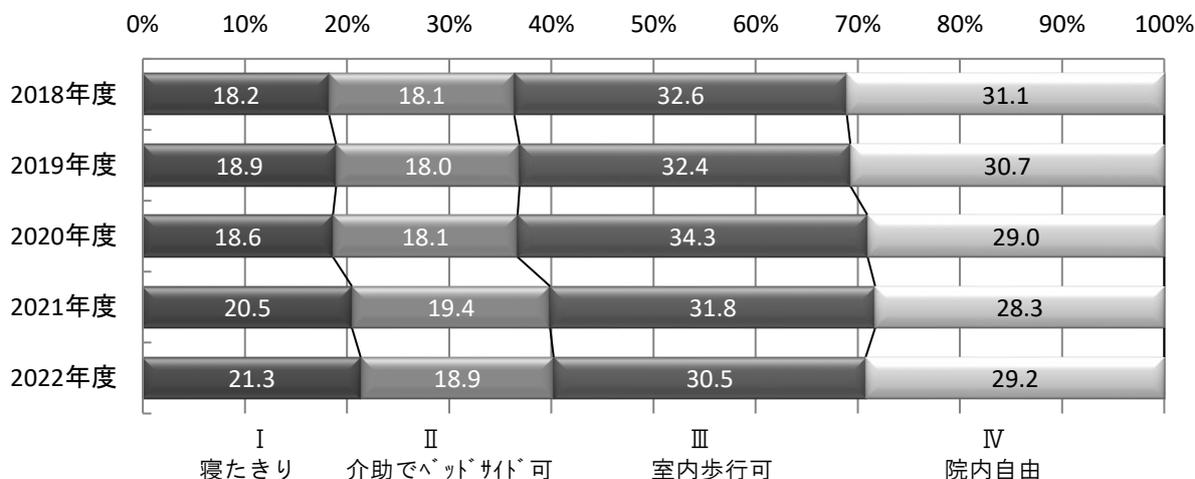
34-4 2022年度 7対1対象病棟別重症度、医療・看護必要度 項目別平均得点および対象患者割合



34-5 看護観察度別患者数の年度別構成比率（全病棟）



34-6 生活の自由度別患者数の年度別構成比率（全病棟）



34-7 年度別外来看護活動状況

(件)

区分		2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
療養指導	在宅療養	2,337	3,922	5,704	7,453	8,012
	自己注射	1,128	1,088	939	841	858
	自己腹膜灌流	9	5	11	1	
	酸素療法	110	73	44	40	32
	人工呼吸	96	177	175	117	131
	中心静脈栄養	51	55	64	42	30
	成分栄養経管栄養	203	63	86	222	35
	自己導尿	51	49	71	93	56
	糖尿病透析予防	144	163	111	99	102
	がん化学療法	75	59	76	164	287
看護外来	造血幹細胞移植看護	225	586	523	559	469
	不妊症看護	-	76	82	72	39
	フットケア	715	749	540	566	455
	糖尿病看護	464	453	333	262	180
	慢性病看護	228	526	370	565	598
	こども看護	51	11	122	103	81
	がん看護	944	191	871	438	216
	周術期看護	132	91	89	42	67
	リンパ浮腫	163	205	157	177	207
	ストマケア	1,030	1,072	932	966	1,063
	母乳外来	92	100	96	80	38
	マタニティヨガ	38	51	2		45
合計	8,287	9,765	11,398	12,902	13,001	

※2019年度より不妊症看護の項目を追加